

近世における焼畑山村の人口移動とその実態

— 大井川最上流の井川地域を事例として —

伊 藤 寿 和

I はじめに

近年、筆者は近世における焼畑に関して、全面的な再検討をおこなっている¹⁾。すなわち、これまでに蓄積されてきた日本の焼畑に関する佐々木高明氏²⁾・野本寛一氏³⁾・橘 礼吉氏⁴⁾をはじめとする詳細な研究は、あくまで、現地調査の時点において確認しえた近現代以後における最終段階の焼畑の姿であると判断される。

前稿⁵⁾において、近世前期の1600年代においては、未だ、古代・中世以来の一年のみ焼畑として耕作する「一年作り」や二年間のみ耕作する「二年作り」など、山地を酷使しない短期的な農法が中心をなし、近世中期以後になって、近現代において営まれる「四年作り」や「五年作り」など山地を長期間に耕作する農法が成立する、およその過程を明らかにした。また、同一の村内においても、焼畑を営む農家ごとの個性が大きく、隣接する村ごとの差異の大きいことも指摘した。

前稿⁶⁾においては、本稿で再検討を加える大井川の最上流に位置する井川地域の焼畑山村の元禄年間の家族の実態を明らかにするために、人口ピラミッド・家族規模など、家族構成の概要の検討と復原をおこなった。ただし、紙幅の関係もあり、通婚や奉公など、焼畑山村で暮らす人々の移動と交流の実態に関しては、具体的な検討を加えるに至らなかった。

速水 融氏の諸研究⁷⁾をはじめとする近世の「人別帳」を利用した歴史人口学をはじめとして、近世における村人の通婚や奉公などの人口移動の検討と復原がなされ、多くの成果が報告されている。また、地理学や民俗学においても、現地調査によって母村を離れての季節的な出作りに関する研究⁸⁾は蓄積されている。

近年では、歴史学の立場からも焼畑に関する論考⁹⁾が発表されはじめたが、未だ、関連史料の紹介と焼畑が営まれていた地域の概要を述べる段階に止まっており、近世になされた焼畑耕作の大きな農法的な変化とその実態については研究の視野に入っていない。

さらに、越中五箇山や越中白川村などの山間村落を事例として、大家族の実態を社会学の立場から検討を加えた小山 隆氏¹⁰⁾の古典的な研究などがある。

けれども、管見の範囲においては、焼畑山村において暮らしていた人々の通婚や奉公など、人々の移動と交流の実態を明らかにした専論の先行研究は見当たらないように思われる。

本稿では、前稿でも検討を加えた大井川の最上流域に位置する井川地域の近世の一次史料を活用して、焼畑山村で暮らした村人の通婚・奉公など人口移動と交流の実態の一端を明らかにしたい。

II 地域の概要と検討史料

本稿で再検討を加える井川地域は、大井川の最上流（図1）に位置する典型的な焼畑山村であった。宮本 勉氏が復原図を描いているように、近世の井川地域は、図2として復原されたように「井川七ヶ村」から構成されていた。特に留意すべきは、中世以来の土豪の系譜を引き、井川地域最大の勢力を有していた海野氏が居住していた上田村を挟んで、北に接する葉沢村と西に接する中西村は、それぞれ半村として位置づけられていた。

井川地域の七ヶ村の中心をなしていた上田村に関しては、焼畑耕作のみを営んでいた「切畑百姓」の家族構成や通婚・奉公など人々の移動と交流の実態が判明する貴重な当時の一次史料が残されている。その史料は、元禄6年（1693）に作成された「上田村家別書上げ帳」（以下、「書上げ帳」と略記）と仮題された人別帳¹¹⁾である。

この「書上げ帳」には、上田村に居住していた71軒に関して、屋敷百姓23軒、借地百姓27軒、寺2軒、そして、焼畑耕作を営んでいた「切畑百姓」19軒の詳細な家族構成が記載されている。さらに、この史料は本籍地主義に基づいて作成されており、すでに他村に嫁いでいる娘や、他村に奉公に出て

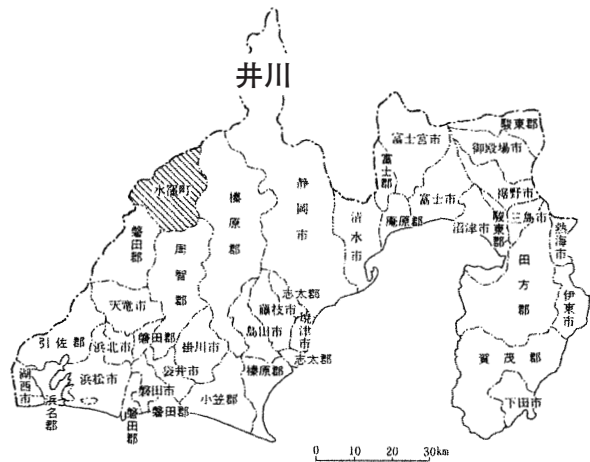


図1 静岡市井川地域の位置（昭和50年代）

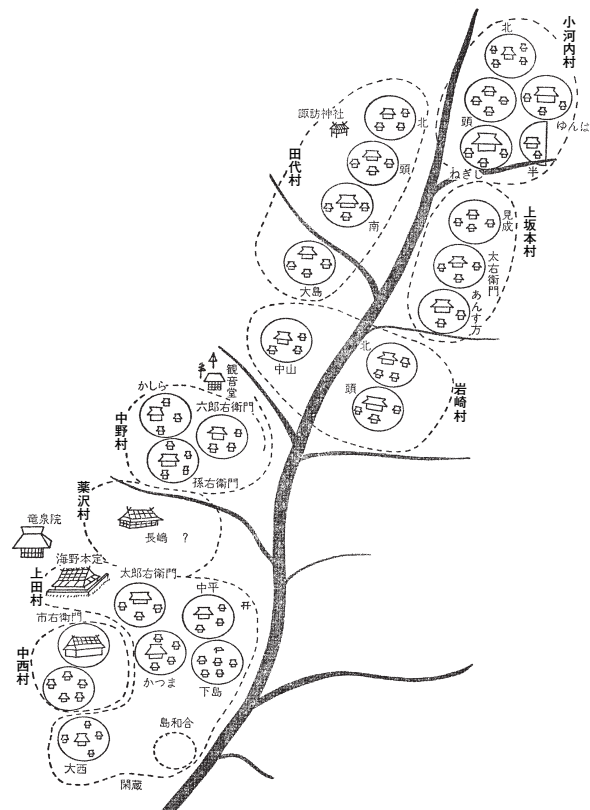


図2 井川七ヶ村の概要図（注11より引用）

いる者なども逐一記載されている。

以下においては、当該の「書上げ帳」に基づいて、焼畑を営んでいた「切畑百姓」の通婚や奉公など人々の移動と交流の実態を比較・検討してゆく。

Ⅲ 人口移動と交流の実態

前稿において検討を加えた屋敷百姓・借地百姓・切畑百姓それぞれの人口ピラミッドと家族規模を簡潔に述べた後に、各々の通婚や奉公などの人口移動を論じてゆく。前稿においては若干の理解の過誤もあり、修正を加えた人口ピラミッドと家族規模の図を再掲しておく。

Ⅲ－１ 屋敷百姓と人々の移動

まず、上田村の百姓の中核をなし、山間での焼畑とともに、母村である上田村において常畠も耕作していた屋敷百姓の人口ピラミッドと家族規模を示したものが図3と図4である。人口ピラミッドからは、10才以下の子供から老人まで、男・女ともにバランス良く居住している人口構成をなし、男・女の召使もそれぞれの年代に雇用されている状況が読み取れる。また、家族規模の図4からは、41人の大家族からなる海野弥兵衛家の1軒、10人から17人の中規模の家族が7軒、そして、7人以下の小規模な家族が16軒と、屋敷百姓の家族規模はおよそ三つのグループに分かれていたことが判明する。特に、中世以来、上田村を支配してきた海野家には、当主である57才の弥兵衛をはじめとして、本籍地主義によって記載された「書上げ帳」であるため、すでに嫁いで不在の娘や、17名の男の召使と16名の女の召使の居住も記載されている。

まず、通婚の実態に関しては、海野家の当主である弥兵衛と総領の弥五兵衛の妻が、直線距離においておよそ30km以上も離れた駿府の城下町から嫁いで来ていることが特に注目される。当

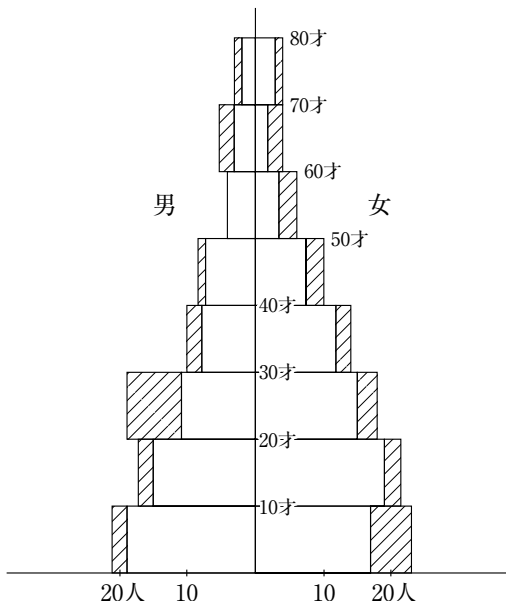


図3 人口ピラミッド (斜線は召仕)

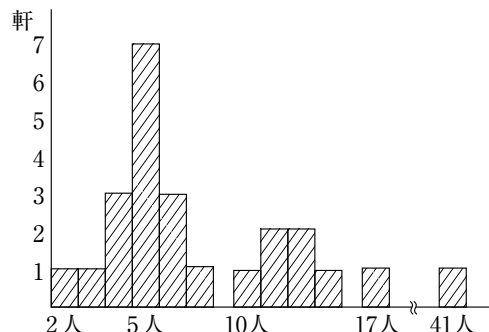


図4 家族規模

主・弥兵衛の妻は駿府の城下町において与力を勤めていた阿野清右衛門の娘であり、総領・弥五兵衛の妻も同じく駿府城下町に居住していた武士と想定される高木仁兵衛の娘であった。さらに、弥兵衛の一人娘である「おあい」も、駿府城下町で与力を勤めていた中村甚八郎に嫁いでいる。戦国時代以来、井川地域の七ヶ村を支配してきた有力土豪であった海野家は、近世前期においても積極的に駿河城下町に居住する武家と縁を取り結び、駿府城下町の人的な情報はもとより、様々な文物や情報などが、嫁いだ娘や妻の実家からもたらされていたことが想定できる。かように、ややもすれば、閉じた生活空間と考えられやすい大井川最上流の井川地域ではあるが、決して閉じた生活・情報空間ではなかったことには十分な留意が必要である。

第二の特徴は、上田村での村内婚が7人（婚入4人・婚出3人）と少ないことである。後に述べる借地百姓の18人、切畑百姓の30人と比べれば、その少なさは際立っている。地元の井川七ヶ村以外の村々とは、婚入5人・婚出9人と多く、地域的にも広いのが特徴である。特に、大井川の最上流に位置する井川地域から、水系を異にする安部川流域の駿府へ通じる難所である大日峠を越えた南に位置する口坂本村から3人と横沢村から1人の嫁を迎えていることは、両村との交流の深さを示している。婚入に対して、婚出の5人は、口坂本村をはじめとして、安部川の上流域に位置し、さらに井川地域から遠い入島村・落合村・柿島村へ嫁いでいることに婚出の傾向が読み取れる。

第三の特徴は、多くの召使が存在していることである。ただし、24軒の屋敷百姓のうち、多く

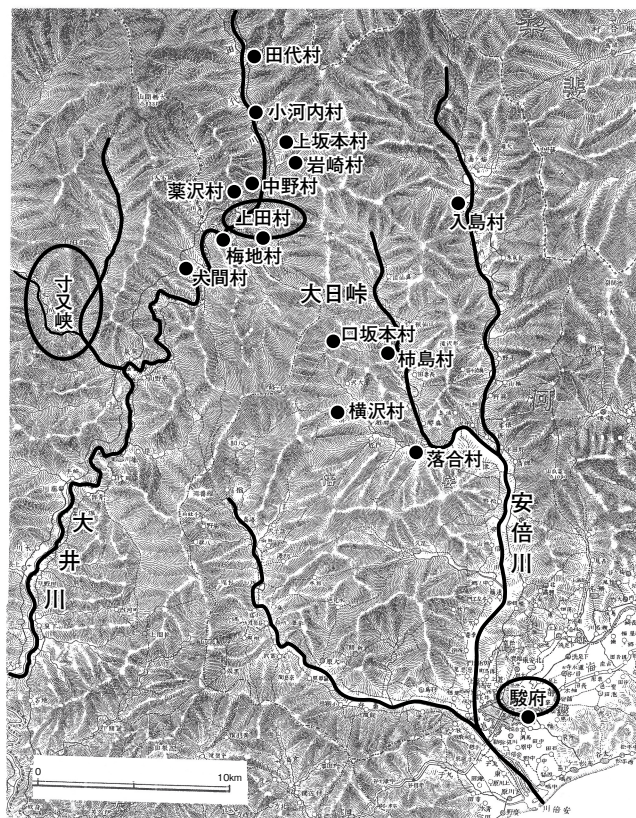


図5 屋敷百姓の通婚

の召使を擁しているのは海野弥兵衛と組頭の喜平次である。召使も含めれば、海野弥兵衛家は41人の、喜平次家は17人からなる大規模な家族構成をなしていた。その内訳は、海野家の召使全員が譜代の召使（男17人・女16人）であり、中世以来の隷属的な関係が未だ残されていた。喜平次家の召使9人のうち、譜代の召使は4人（女のみ）であり、残りの召使たちは同じ上田村から「10年切り」にて雇用されていたものが4人（男1人・女3人）、「五年切り」にて雇用されていたものが1人（女）であった。海野家の中世的な隷属関係に基づく多くの召使に対して、近世的な年季契約に基づく雇用の召使がおよそ半ばを占めている。

以上、屋敷百姓に関する通婚の移動を示したものが図5である。

Ⅲ-2 借地百姓と人々の移動

小作人にあたる借地百姓の人口ピラミッドと家族規模を示したものが図6と図7である。上で述べた屋敷百姓に比べて、人口ピラミッドに凹凸が見受けられ、不自然な年齢構成をなしていることが読み取れる。「書上げ帳」において他村へ奉公に出ていることが確認できるのは男1人のみであり、10才代と20才代の男女の居住者が少ない理由は明らかにしえない。あるいは、「書上げ帳」において意図的に過少に申告・記載がなされている可能性も考えておく必要がある。一方、図7から読み取れる家族の規模は、上記の屋敷百姓のように、大規模・中規模・小規模の3グループに分かれている状況ではなく、7人を中心とする比較的安定した、一つのグループをなしていたとみなして良からう。

通婚に関しては、海野家の三例と同様に、組頭の伝十郎の息子が駿府城下町の町人と想定される草深町の六兵衛家に婿に入っていることが注目される。戦国期以来の土豪の系譜を色濃く残している海野家だけではなく、海野家の小作人にあたる借地百姓で組頭を勤めていた伝十郎家も、

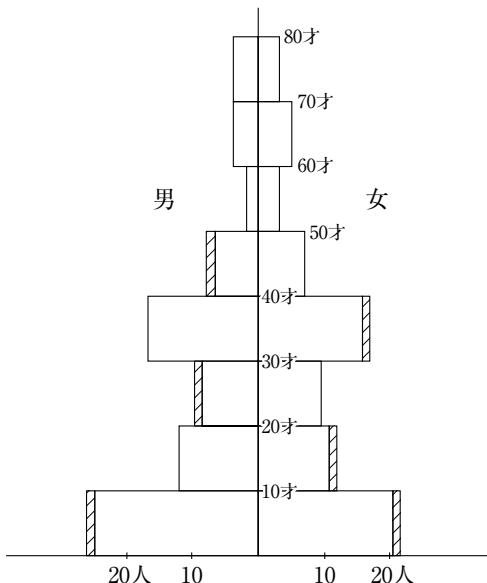


図6 人口ピラミッド (斜線は召仕)

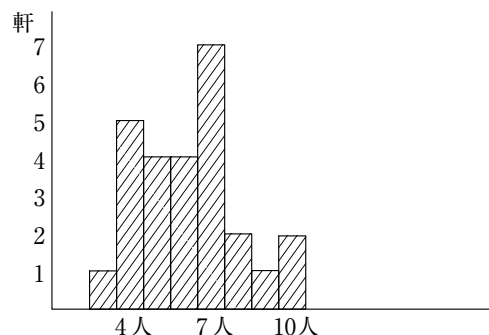


図7 家族規模

井川地域から遠い駿府城下町の町人と婚姻を取り結ぶほどの人脈を有していたのである。

次に、屋敷百姓の村内婚がわずか7人であったのに対して、借地百姓の村内婚は18人（婚入10人・婚出8人）を数える。また、地元である井川地域以外との通婚の事例も、屋敷百姓の11人を越え、14人を数える。大日峠を越えた安部川流域との通婚の実例は、口坂本村に養子に行ったものが1人いるのをはじめ、婚入の例が腰越村の1人であるのに対して、婚出の例は安部川の最上流に位置する入島村をはじめとして、安倍川中流域に位置する桂山村の例など、屋敷百姓の事例以上に、より広い地域に婚出していることが見て取れる。さらに、奉公に出ている1人も駿府城下町対岸の安倍川下流に位置する羽鳥村である。

このように、大井川の最上流に位置している井川地域ではあるが、海野家の小作人にあたる借地百姓たちも、険しい大日峠を介して、安部川流域の村々と通婚や奉公などを通じて、屋敷百姓以上に広範な人的交流をなしていたことが判明する（図8）。

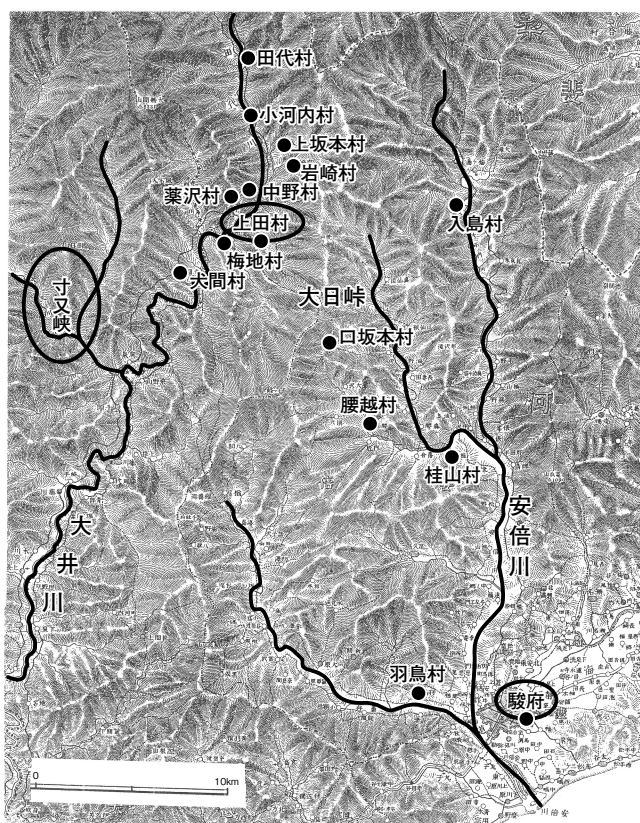


図8 借地百姓の通婚と奉公

Ⅲ－3 切畑百姓と人々の移動

大日峠を越えて安倍川流域の村々と通婚や奉公などの人的な交流を有していた屋敷百姓と借地百姓に対して、母村である上田村から徒歩でも2日ほどかかる井川地域の南西に離れて焼畑耕作に専従していた切畑百姓の実態は、全く異なった状況を呈している。

すなわち人口ピラミッド（図9）は比較的安定した形態をなし、家族規模（図10）は3グルー

ブからなる屋敷百姓と1グループからなる借地百姓の中間形態をなしていたと判断されよう。

他方、特に注目されるのは、村内婚の事例が圧倒的に多く、30人（婚入15人・婚出15人）を数える。その実態は、直線距離にして10km以上もの距離を有する母村の上田村の屋敷百姓や借地百姓との通婚ではなく、確認しうる範囲においては、ほぼすべてが同じ寸又峽に居住して焼畑耕作を営んでいた切畑百姓19軒内での通婚である。上記で述べた屋敷百姓と借地百姓の村内婚とは、その内実が異なっているのである。

ただし、寸又峽に居住していた上田村の切畑百姓の通婚が、すべて寸又峽の切畑百姓内で完結していた訳ではない。すなわち、犬間村や千津村（千頭村）など、大井川流域の村々との間に通婚に基づく人的な交流をなしていたことが判明する。焼畑耕作を営んでいた切畑百姓たちも、寸又峽内のみでの閉じた人的交流をなしていた訳ではないことが明らかとなった意義は大きいと判断される。

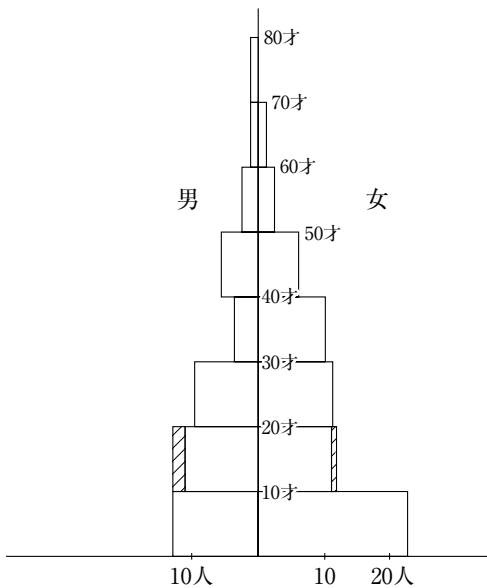


図9 人口ピラミッド（斜線は召仕）

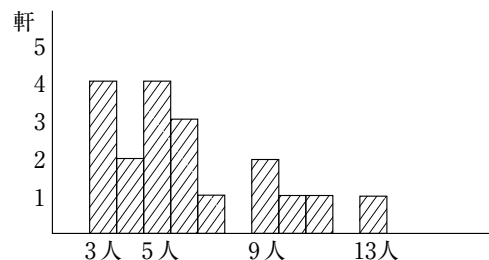


図7 家族規模

召使に関しても、切畑百姓内の秋丞が「4年切り」にて雇用されており、井川地域の母村との中間に位置する犬間村からも美之助を「2年切り」にて雇用している。また、大井川上流の中心的な村落の一つである千津村（千頭村）と谷畑村へ、組頭・三郎左衛門の兄である長兵衛（67才）が「榛原郡千津村へ四拾年以前二仕付申候」などのように記載されている。召使とは明確に書き分けられているが、4人に記載されている他村への「仕付」の実態は不明である。

上記の屋敷百姓や借地百姓ほどは広くないが、寸又峽に居住して焼畑耕作を営んでいた切畑百姓たちも、周辺に位置する他村との間に通婚や奉公、さらには「仕付」などの人的な移動と交流をなしていたことが判明した（図11）。

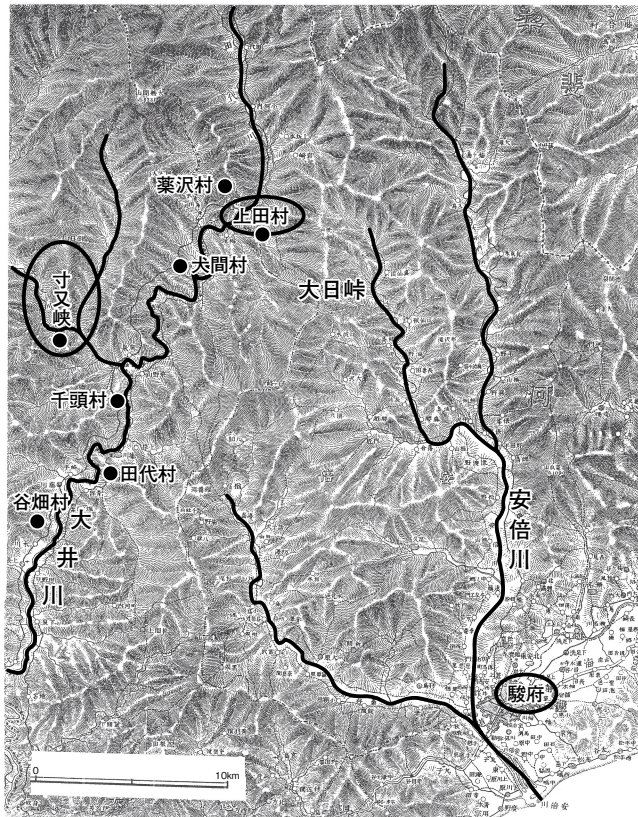


図11 切畑百姓の通婚と奉公・仕付

Ⅳ おわりに

本稿は、大井川の最上流域に位置する典型的な焼畑山荘であった井川地域を具体的な事例として、近世前期の元禄年間の人別帳である「書上げ帳」を史料として、焼畑山村に暮らしていた人々の通婚や奉公などの人的な移動と交流の実態の一端を復原した、管見の範囲において、初めての研究である。焼畑山村に暮らす人々の特徴を明らかにするために、上田村の「書上げ」に記載された屋敷百姓・借地百姓と比較することにより、「切畑百姓」の特徴が判明した。明らかにしえた、ささやかな成果は、以下のようにまとめることが可能であろう。

第一に、母村である上田村から徒歩にても二日ほどの距離を有する山間の寸又峽に居住して焼畑耕作を営んでいた19軒の切畑百姓たちの通婚に関しては、その大半が寸又峽内の村内婚であった。ただし、すべてが寸又峽内の閉じた通婚をなしていた訳ではなく、その数は少ないけれども、周辺に位置する犬間村（2人）、千津（千頭）村（1人）、谷畑村（1人）、そして、同じく寸又峽内の大間平（5人）の村々と通婚の縁を有していた。焼畑山村の村と言えども、決して閉じた生活空間を形成していた訳ではない実態が判明した。

また、その内実は不明であるが、「仕付」と言う名において、大間平に2人、千津（千頭）村に1人、谷畑村に1人が他出していた。

第二に、母村である上田村の中心をなしていた屋敷百姓たちの通婚に関しては、戦国以来の土豪の系譜を引く海野家の当主と息子と娘の三名が、いずれも、駿府城下町の武家と婚姻しており、組頭を勤める借地百姓も駿府城下町の町人へ婿入りしていた。

大井川の最上流に位置する井川地域であるが、険しい大日峠を介して、駿府の城下町の武家や町人たちと通婚の縁を有し、人的な情報や、様々な文物の情報が井川地域にもたらされていたことが十二分に想定される。井川地域を大井川最上流に位置して、閉じた、遅れた焼畑山村であるとの理解は、実態を見誤ることになろう。

第三に、屋敷百姓と借地百姓は、大井川流域の村々との通婚はもとより、駿府へと通じる険しい大日峠を越えて、口坂本村や入島村をはじめとして、流域を異にする安部川流域の村々とも通婚・奉公の交流をなしていた。ただし、通婚の場合、婚入の事例よりも、婚出や奉公の事例の方が、より遠方の村々に出ている実態も判明した。

今回取り上げた切畑百姓の事例は、母村である上田村から離れた寸又峡において焼畑耕作と日々の生活を営んでいた、やや特殊な事例の焼畑山村で暮らす人々の通婚と奉公などの実態である。次には、同じ地域の母村内に共に居住する、屋敷百姓・借地百姓・切畑百姓の通婚・奉公など人々の移動と交流の実態を、より詳細に明らかにしたいと念じている。

付記 名古屋大学の溝口常俊先生の学恩に心からの感謝を込めまして、謹んで本稿を献呈させていただきます。

注および参考文献

- 1) 伊藤寿和 (2011) 近世前期における焼畑耕作の実態について、史草51号。
同 (2010) 近世における会津地域の「焼畑 (鹿野畑)」に関する基礎的研究、日本女子大学紀要・文学部、59号。
同 (2012) 近世における焼畑山村の家族の実態と焼畑農法の変容について、日本女子大学紀要・文学部、61号。
近世前期における焼畑耕作の農法的な変容に関しては、次の論文も必読である。
米家泰作 (2005) 近世出羽国における焼畑の検地・経営・農法、歴史地理学、223号。
- 2) 佐々木高明 (1971) 『稲作以前』、日本放送出版協会。
同 (1972) 『日本の焼畑』、古今書院。他多数。
- 3) 野本寛一 (1986) 『焼畑農耕文化論』、雄山閣出版社。他多数。
- 4) 橘 礼吉 (1994) 『白山麓の焼畑農耕』、白水社。他多数。
- 5) 伊藤寿和 (2011) 近世前期における焼畑耕作の実態について、史草51号。
- 6) 同 (2012) 近世における焼畑山村の家族の実態と焼畑農法の変容について、日本女子大学紀要・文学部、61号。
- 7) 速水 融 (2009) 『歴史人口学研究 新しい近世日本像』、藤原書店。
- 8) 前掲2) の佐々木氏の諸研究や前掲4) の橘氏の諸研究など、詳細な現地調査に基づく論考は数多くなされている。
- 9) 最新の研究としては、次の論考と総論がある。

- 山本智代（2011）近世の日野・八王子地域における焼畑の位置、
原田信男（2011）近世における開発と景観の諸相、
ともに、原田氏編『開発と村落景観の歴史的展開 - 多摩川領域を中心に -』、
思文閣出版に収録。
- 山本智代（2011）白山麓十八ヶ村とむつし関係史料について、
原田信男（2011）中日火耕・焼畑史料考、
ともに、原田・鞍田編『焼畑の環境学』、思文閣出版に収録。
- 10) 小山 隆（1988）『山間聚落の大家族』、川島書店。
- 11) 宮本 勉（1975）『編年史料 井川村史』第二巻、名著出版。